



宗祇水かたはら走る浮輪の子
 宗祇水踊子の来てるたりけり
 郡上二夜踊り踊りて情の濃く
 朔日路すぐ尽き山へ突き当り
 白山の禅定道を行く蜥蜴
 産道のかくも暗きか蟬の穴(郡上六句)

汗引くや小諸の風に他ならず
 豆の花夕暮浅間ふつと噴き

八朔の土俵や虚子の散歩道

山道に尾長鳥出て求愛す

三重の塔の下闇君を恋ふ

避暑名残桃の冷製パスタかな(小諸六句)

俳句碎々

小林貴子

文語の形容詞、たとえば「涼し」の連用形は「涼しく」だが、連用形にはもう一つ「涼しかり」がある。これは「涼しかりき」「涼しかりけり」など下に特定の助動詞が来る場合の形であり、文章をこれで止めることはしない。しかし、俳句においては「かり」活用で止めている句は古今東西よく見られる。上五や下五に「涼し」の語を置きたい場合に五音の形を探すと、まず「涼しかり」が思いつくからだ。

かつて一泊吟行会の夜、同室の上村敦子さんが、信大学生合同句集『瀧』の〈寒念仏猫の相づち大きかり(吉野志保子)〉の句を読んだ時に「かりで留めてよいのかと思った」

と疑問を呈され、一緒にいた小伊藤美保子さんが「それ、私の妹の句です」と言って爆笑となった楽しい思い出があるが、私は「かり留め」に違和感を感じなかった。しかし、山西雅子『俳句で楽しく文語文法』(角川選書)、佐藤郁良『俳句のための文語文法入門』(角川学芸出版)等ではやはり、「かり」活用は助動詞が下接する場合のみに用いられる形なので、これで終止するのは正しくないという。

ではどうしよう。〈夢違観音に逢ふ涼しさよ〉まず「涼しさよ」が思いつくが、呼びかけの「よ」の終止を多用すると私は押しつけがましい気もする。〈ウエストン卿へ花東涼やかに〉とも考えた。あなたもくふうしてみてください。